

北久保まりこ

「千年を隔てし人の思慕」とは、一〇一〇年前後の恋をうたった古歌の作者の意味だろう。勅撰集で言えば、『後撰集』あるいは『古今集』になる。その時代の恋の歌への淡い共感。

猿田彦の社でじやらじやら開運の鈴の音空の青に吸  
わせる 森屋めぐみ

下句「鈴の音空の青に吸わせる」に特色を見る。猿田彦神社は芸能の神として知られるだけに、明るく、陽気な空気。下句はその空気をうまく受け止めている。

築地正子いまさずなりて三年と詠みたる人もいまさ  
ずなりて 河野千絵

この世での出会いと別れ。たんたんと表現しているが足下に暗く淋しい穴がいているような、人生の淋しさを感じさせる。くり返しが入れ子を連想させるからか。

居残りの人なき雨の日を選び氷河期をめぐる文献を  
読む 服部崇

仕事場を非日常的な角度で照らした一首。ふだんとはまったくちがう空気の中で、何万年、何十万年昔の地球について読む不思議な時間。地球温暖化に取り組む仕事をしている作者には、逆に、これが日常なのかもしれない。これも、入れ子の不思議が魅力。

私が怒るとふしぎがる生徒 あなたたちもつと真面目に怒れ  
小川真理子

高校教師の教室の歌。怒ることが少なくなった現代の

高校生への率直な思いである。「あなた」という二人称が、読者に、教室の雰囲気等に関して予想以上の情報を与えてくれている点に注目。

十六のこの子思春期反抗期「ん」の字になって部屋  
隅にいる 武田ますみ

「……「ん」の字となつて部屋隅にいる」は的確で、思わず笑ってしまった。見事。かるい調子も、いい。

新しき電子の辞書に花映り小鳥の鳴けり何かせつな  
し 木多川夏

電子辞書には、カラー写真が見られたり、声や音を聞くことができるものがある。バーチャルなそれの、せつなさ、いじましさ。ただ、「電子の辞書」はいかが。

行間に雲降るなり障害を個性と思えと育児書は言う  
中川弘子

書物の中に入って行けない感じを表現した第一、二句が独特。納得できないまま、しかし、本をまだ閉じえないでいる何分かの時間が主題。

カマキリがバツタ食ひをり柿の木の百舌へ目玉を光  
らせながら 西野國陽

一読、散文的なゴツゴツした感じがするのは、名詞が多いからである。とくに一首中に動物名30植物名1が登場するのは珍しい。山上憶良の秋の七草をうたった旋頭歌は例外として、四種の鳥の名前が出てくる牧水の「鶺鴒ひばり眼め児こ燕つばき山雀やまがら鳴きしきり桜はいまだひらかざるなり」(朝の歌)などが珍しい例。